

『かげろふ日記』の「かげろふ」考

武 山 隆 昭

はじめに

「猶ものはかなきをおもへはあるかなきかの心ちするかげろふのなきといふへし」（桂宮本）という上巻末尾の叙述が『かげろふ日記』命名の由来であることは論をまたない。そして、この部分の文意は、「あるかなきかの心ちするかげろふのごとき、とりとめもない日記」と解するのが通説で、大鏡兼家伝の「かげろふの日記と名づけて」は訛伝であるという。

「かげろふのなき」を、固有名詞ではなく、普通名詞とした場合、「かげろふ」とは何かを追求したくなる。「かげろふ」については従来、① 陽炎（野馬）、② 蜉蝣（ウスバカゲロウのなかま）、③ 蜻蛉（トンボ）、④ いとゆふ（Gossamer）、の四説がある。「はかない」存在のものならどれでもかまわないのではないかと思われる方もあると思うが、この問題は筆者なりに重要性を持っていると考えている。

すなわち、筆者は先に『かげろふ日記』冒頭のいわゆる序文の「よにおほかるそらごとだにあり」の解釈について一つの試案を発表した。^(註1) その小論の中で「道綱の母の日記執筆の意図」を「物語のそらごと・いつはりを否定し、自

己の人生をありのままに書く自叙伝としての『日記文学』というジャンルの創作に意欲を燃やしたこと、そしてその出来映えに自信めいたものを持っていたこと」と述べた。その場合、「人にもあらぬみのうへまでかき日記して」という対象としての自己の身の上を、道綱の母自身がどのように感得していたかを把握することは、『かげろふ日記』を読む上で大変重要な問題を含んでいる。序文で「いとものはかなくともかくにもつかでよにふる人」と述べ、上巻跋文で「ものはかなき」と述べたような自己のありようを、「かき日記して」、「あるかなきかの心ちするかげろふのなき」と規定したのである。したがって、この「かげろふ」は、道綱の母の自己のありように対する認識を、集約的・象徴的に表した語であると言える。ここに「かげろふ」追求の意義を見出す。

ところで、諸注釈書が「かげろふ」をどうとっているかを、ここで概観しておく。

①陽炎（野馬）説

上村悦子『校注古典叢書蜻蛉日記』（明治書院）他

柿本 奨『蜻蛉日記全注釈上下』（角川書店）

村井 順『かげろふ日記全評解上下』（有精堂）

橘豊・田口守『蜻蛉日記』（桜楓社）

加藤正雄『かげろふ日記要解』（有精堂）

ただし、上村氏は「この日記の『かげろふ』は陽炎の現象自体を指すというよりも陽炎の現象が実体なく、空しくはかないところから、「あるかなきかの」の枕詞や譬喩として用いられ、はかなき身の上を表す象徴用語と考えられる。」と付け加えておられる。

②蜉蝣（ウスバカゲロウのなかま）説

武山隆昭『古典新釈シリーズかげろふ日記』（中道館）

③ 蜻蛉（トンボの一種）説

増田繁夫『対訳日本古典新書かげろふ日記』（創英社）

④ いとゆふ（Gossamer）説

川口久雄『日本古典文学大系20』（岩波書店）

⑤ きめがたい。

大西善明『蜻蛉日記新注釈』（明治書院）

木村正中・伊牟田経久『日本古典文学全集9』（小学館）

喜多義勇『日本古典全書蜻蛉日記』（朝日新聞社）他

こうして概観すると、陽炎説が多数で、虫と考えるのは少数派ということになる。筆者は小著で「①は有力であるが、春のうららかな感じと、はかなさが調和しないので、短命ではかなさの代表のように言われた蜉蝣の意と解する②説に従いたい」と述べた。これだけでは弱い感じがするので、「かげろふ」の語誌の面から補強したいというのが本稿の目的である。

一 いとゆふ説、トンボ説の検討

「いとゆふ」(Gossamer)とは、川口久雄氏によれば、「わが常民の間で『雪迎え』とよばれていたもの、晩秋や早春の空をゆらゆらと流れるようにとびかう糸遊いとゆふである。目にみえない蜘蛛の子が、自ら紡ぎ出す糸に乗って、風媒

よつて散布される姿の、もつれとぶ五彩のてりかけり、私は戦争の終末が近づいた晩秋のある日、人間を絶した立山の雑穀谷の澄んだ空気の中をとぶのを見た^(注5)」ということであるが、柿本奨氏は「これは王朝人の筆にのぼらぬ所であつたようで、とくに歌に詠まれなかつたという意味で、ここには不当と思われる」と川口説を否定し、上村悦子氏も「漢詩に春の現象として見えるが、京都ではまず見られぬ現象である^(注7)」と否定しておられる。和漢朗詠集^(注8)と菅家文草に「遊糸」の例を見出すし、六百番歌合に「遊糸」の題が出され良経らが歌を詠んでいるし、『夫木和歌抄』に「遊糸」の項があり十三首並んでいるので、平安朝の都人にまんざらなじみのないものでもなさそうな気がするが、「かげろふ」と呼んだ証拠がないので筆者もゴッサマー説は否定したい。(陽炎のゆらゆら立ち上る水蒸気を遊糸に見たてそう呼んだ例は見られるが、逆の例は見つかっていない。)

次に「トンボ」説であるが、これは「カゲロウ」とトンボ・アキツとを同一視したことよつて生じた誤まりである。トンボは、昆虫類トンボ目に属しイトトンボ科ヤンマ科などに分かれる。これに対して、ウスバカゲロウ科やクサカゲロウ科などは脈翅目に属し、別の種類である。しかし、上代においては、同じように透き通つた四枚の羽を持ち、胴の細いよく似た形態であるため、区別できなかったのであろう。

トンバウの例で管見に入つた最も古い例は、

太刀をぬいてたゝかふに、かたきは大勢なり、くもで・かくなは・十文字・と(シ)ばうかへり・水車、八方すかさずき(ツ)たりけり。(『平家物語』巻第四、橋合戦。大系本上三一〇頁)

である。上古においてはアキツと呼ばれていたわけで、『古事記』下巻・雄略天皇の条に、

即ち阿岐豆野に幸でまして、御獮したまひし時、天皇御具床に坐しましき。爾に蝸(武山注アブ)御腕を昨ふ即ち蜻蛉来て其の蝸を昨ひて飛びき。(古典大系本三一五頁の読みによる)

とある。しかも古事記本文の割注に「訓ニ蜻蛉ニ云ニ阿岐豆。」とあり、アブを食ったのだからオニヤンマか何か大形のトンボだったと想像されるのを蜻蛉と記しているのである。同様の記事を伝える雄略紀四年八月の条にも蜻蛉の文字を用いている。

一方、『かげろふ日記』を『蜻蛉日記』と記したのは、定家の『明月記』（寛喜二年六月十七日の条）が最初のもうで、それ以後トンボ説が出たものと思われる。

アキツは、『新撰字鏡』に「翊阿豆」とある他は『名義抄』『倭名抄』『字類抄』に見あたらない。しかし時代が下ると、例えば『増補下学集』（寛文九年刊本）には、「蜻蛉トシバウ 字書ニ云ク蜻蛉色青クシテ大ナルヲ蜻蛉ト曰フ日本ヲ呼テ秋津ト云フ也」とあり、『早大本節用集』には「蜻蛉トシバウ」「秋津トハ蜻蛉也」などとあって、アキツとトンバウは同じ虫の呼び名で、蜻蛉とも蜻蛉とも書くことが一般化していた。

しかし、ここでは上村悦子氏の「とんぼは王朝文学にはごく稀にしか表れず、しかも手にとって眺めることも可能な虫で、『あるかなきかのはかなさ』の感じはしない」(注1)に従いたい。

二 「陽炎」説の検討

陽炎は、春のよく晴れた日に空気や地面が日光に熱せられると、密度が小さくなった空気や地面の水分が水蒸気になったものが幾筋もの糸のようになって上昇してゆき、そのため光が屈折して向こうの景色がゆらゆら揺れて見える現象を言う。

『古事記』『万葉集』には、「かぎろひ」「かげろひ」という語形が出てくる。

波瀾賦坂に到りて、難波の宮を望み見たまへば、其の火猶炳かりき。爾に天皇亦歌曰ひたまひしく、
波瀾布坂 我が立ち見れば かぎろひの 燃ゆる家群 妻が家のあたり
とうたひたまひき。(『履中記』、大系本による)

「かぎろひの」は「迦芸漏肥能」とあり、総索引によると、渡会本・寛元本は「ゲ」となっている由である。この歌を物語の中に置いて解釈すれば、本物の火 (fire) ということになるが、大系本頭注にあるように「この歌は所伝としくり合っていない。妻問いをした夫が、朝妻の許から帰る途中、坂の上から妻の家を見てよんだ歌か、もしくは、単に坂の上から、春の陽炎の燃える妻の家のあたりを見てよんだ夫の恋の歌であろう。」と思われる。

『万葉集』でも、

今更に雪降らめやかぎろひの燃ゆる春べとなりにしものを(巻十、一八三五。春の雑歌、詠雪十一首のうち。

大系本による。原本「蜻火之」)

……世の中を 背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り……(巻二、二一〇。柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌二首のうち。原本「蜻火之」。二二三は「香切火之」)

と「燃ゆる」に係る用例があり、語源は『岩波古語辞典』に言うように、「ちらちらと揺れて光る・火」であろう。

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ(巻第一、四八。人麿。原本「炎」)

……平城の京師は かぎろひの 春にしなれば……(巻六、一〇四七。福麿歌集。原本「炎乃」)
のように、「炎」の字を宛てていることから領ける。

次に『万葉集』の用字で注目しなければならないのは、「蜻火之」である。これは前掲二首の他に、巻九、一八〇四に「蜻蜓火之」とある例とも併せて考えねばならない。

藤堂明保『学研漢和大典』によれば、「蜻」は虫と青（きよらか、すずしい、すみきった）の会意兼形声文字で、①「蜻蛉」とはすずしい声でなくこおろぎ。②「蜻蜓」「蜻蛉」とはすつきりした形をしたとんぼ。あきつ。「とあり、諸橋大漢和も「こほろぎの一種」「むぎわらぜみ」と注している。

「蜻火」「蜻蜓火」を義訓と考え、意味の上から説明しようとすれば、トンボが群をなして飛び交う際方向を変えらる度に羽がキラリと光るのが、陽炎に似ていると見なされたからであろう、とでも言おうか。どうも無理なようである。

橘豊・田口守氏^(注)は、

トンボの古い名称が「カギロ」「カギル」等であったから（借訓）とみるべきだろう。『万葉集』には、「カギロヒノ」の他に、「タマカギル」という近似した語がある。「玉限」「玉垣入」「玉蜻」「玉蜻蜓」「珠蜻」等の語で表記されている。これらが多く夕暮の情景の描写に用いられている故陽炎とは別の現象と考えられるが、「タマカギル」の中の「カギル」に「蜻」、「蜻蜓」を当てるのも、トンボの名称として、「カギル」「カギロ」等を想定することの論拠になろう。

と述べておられる。筆者はこのお説にヒントを得て、ウスバカゲロウの類を上代に「カギル」「カギロ」と呼んだのではないかという仮説を提出する。そうすれば『名義抄』『倭名抄』で「蜻蛉」をカケロフ・加介呂布と読んでいることを説明しやすいのである。さて、蜻蜓・蜻蛉については次章で改めて考察することとして、しばらく陽炎の考察を続ける。

「かぎろひ」が音転して「かげろふ」になったとするのが通説であるが、いつ頃からか分明でない。竹取・伊勢・大和・落窪には用例がない。古今・後撰・拾遺・宇津保・古今六帖の用例をまず列挙する。番号は用例の通し番号で

ある。

- 1 陽炎のそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞぬれぬる（『古今集』卷十四恋四、七三一。題しらず、読人しらず）
- 2 陽炎に見しばかりにや浜千鳥行くへもしらぬ恋に惑はむ（『後撰集』卷十恋二、六五五。題しらず、等朝臣）
- 3 陽炎の仄めきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身を辿りつる（『後撰集』卷十二恋四、八五七。女につかはしける、読人しらず）
- 4 哀ともうしともいはじ陽炎のあるかなきかにけぬる世みよなれば（『後撰集』卷十七雜三、一一九二。題しらず、読人しらず）
- 5 世中といひつる物は陽炎のあるかなきかの程にぞ有ける（『後撰集』卷十八雜四、一二六五。題しらず、読人しらず）
- 6 夢よりも儂なき物は陽炎の仄かにみてし影にぞありける（『拾遺集』卷十二恋二、七三三。女に遣はしける、よみ人しらず）（『拾遺抄』恋上、二六九）
- 7 かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるともおもはざらん
とほのかにいふこゑ、いみじうおかしうきこゆ。（『宇津保物語』としかげ。古典文庫前田家本）
- 8 （右大将）「かげろふこそ、これにはたてまつるべかめれ。おぼつかなくては」とのたまふ。うへ「おぼめくより、はかなくてやはありません。いで、なしらせそや」などのたまふ。（『宇津保物語』内侍のかみ）
- 9 世の中と思ひし物を陽炎のあるか無きかの世にこそ有りけれ（『古今和歌六帖』第一、かげろふ。国歌大系による）

- 10 陽炎の其れかあらぬか春雨の降る日と見れば袖ぞ濡れぬる (同前)
 - 11 陽炎のさやにこそ見ねぬば玉の夜のひとめは恋しかりけり (同前)
 - 12 陽炎の一めからにや怪しくも面忘れせぬ妹にも有るかな (同前)
 - 13 陽炎の一目ばかりはほのめきて来ぬ夜数多に成りにけるかな (同前)
 - 14 あると見て頼むぞ難きかげろふのいつとも知らぬ身とは知るく (同前)
 - 15 陽炎の仄めく影を見てしより誰とも知らぬ恋もするかな (同前)
 - 16 徒然の春日にまがふ陽炎の影見しよりぞ人は恋しき (同前)
 - 17 手に取れど絶えて取られぬ陽炎の移るひ易き君が心よ (同前)
これに、私家集大成から拾った用例を加える。
 - 18 かげろふのゆきされくれてさつ人の ゆつきかたけにかすみたなひく (『柿本人麿集』書陵部蔵、一九。霞。他に、赤人Ⅰ一二五、赤人Ⅱ八に語句に一部入れ替えがあるだけの類歌あり)
 - 19 かげろふの水にとわたるほとよりも はかなくみしみゆめかうつゝか (『相如集』内閣文庫蔵、六一、はつかに物いふ人に)
 - 20 かげろふのよのつねなさを思ひしる 人のこゝろをしる人もかな (『大斎院御集』書陵部蔵、二九)
 - 21 かげろふのあるかなきかのよの中に われあるものとたれたのめけん (選子Ⅱ『弐心和歌集』書陵部蔵、四二)
- 以上が、源氏物語時代以前の用例である。(以後の和歌集のよみ人知らずの歌や住吉物語の長歌など、時代の不確定なものは除いた)

右掲の21例は、すべて「かげろふ」と読むらしく、「かぎろひ」の例は見あたらない。ほとんど「陽炎」の文字が宛てられているが、「野馬」とともに本来は漢語で、「野馬」がヤバと音読されて殆んど和文に用いられないのに対し、「陽炎」はカゲロフという熟字訓を宛てられて盛んに用いられたのである。

通し番号457921の用例のように「かげろふのあるかなきか」という表現は、西暦九五〇年代には既に一般化し熟語のように用いられていたことがわかる。それは、陽炎がゆらゆら揺れる不安定な存在で実在感に乏しいことから生じた観念であろう。110の「それかあらぬか」、17の「手に取れど絶えて取られぬ」がその事情をよく捉えている。また、3671315の「仄めく」「仄かに」の「ほの」は、「うっすらわずかに現れるさまを表す語根」で、実体のはっきり捉えられないもどかしさ頼りなさを「陽炎」が持っていることを知る。次に、2121314の例は、「ちらっと瞬間的に」といったニュアンスで「かげろふ」を捉えている。「ちらちらと揺れて光る火」という語源から説明できよう。81116は、はっきりしないもの・ぼんやりしたものの意で陽炎の性質を生かした用例と言えよう。『古今和歌六帖』では、「天象の部、稻妻」の次に「かげろふ」として九首出ており、陽炎の意に解していたことは論をまたない。ところが、残りの181920については問題を含んでいるので、次章で採り上げることにする。

三 ウスバカゲロウのなかま説

『源氏物語』「かけろふ」の巻末、

22 ゆふくれかけろふのものはかなげにとひちかふを

ありとみて手にはとられすみれば又ゆくゑもしらすきえしかけろふ あるかなきかの

とれいのひとりこち給とかや (大成卷三、「とかや」のない本がある他大きな校異はなし)

の「かげろふ」は、虫と考える他ない。しかも、その虫は「あるかなきかの」という連想を伴っている。筆者はこれを、ウスバカゲロウ、クサカゲロウ、ヒロバカゲロウといった脈翅目に属する昆虫であろうと考えるのである。トンボ目によく似た形態をしているが、トンボより羽が長く、腹部が短い。トンボと比べ全体的に弱々しい感じで、「ものはかなげにとひちかふ」と言うのがピッタリである。しかし、ひらひら飛んでいるわりにはすばしこく、素手で捕えようとしてもまず逃げられてしまう。一度捕えそとなった虫は、さっと遠くへ飛び去ってしまう。正にこの歌の通りなのである。しかも、「成虫は夕方から夜にかけて活動し、灯火に集まることが多い」と昆虫図鑑類に説明しており、「ゆふくれ」という場面にも合致している。ただし、後述する「蜉蝣目」のカゲロウとは分類上全く別の種類であることを付け加えておく。(平安時代の人々が区別して意識していたかどうかは別問題である)

このように、虫と考えねばならぬ用例を左に挙げる。

23 「狭衣が」思ひがけず、いづれにも音づれ給ふことは、かげろふに劣らぬ折々もあるに、(『狭衣物語』卷一、大系本三四頁)——狭衣が女性達のどなたへも次々と訪れなされるのは、まるでカゲロウが飛び廻るようだというのである。

24 夕暮に命かけたたるかげろふの ありやあらずやとふもはかなし(『新古今集』卷十三恋三、一一九五。けふとちぎりける人の、「あるか」ととひて侍りければ、読人不知。大系本)

25 ある朝、いその方よりかげろふな(シ)どのやうにやせおとろへたる者よろほひ出きたり。(『平家物語』卷三有王。大系本)

26 命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。

(『徒然草』第七段。大系本)

次は『夫木和歌抄』の「蜻蛉」十首から三首、

27 蜻蛉つとねは命いのちかけたたる夕露にたまのをすく雲のいとすぢ

順徳院御製

28 夕暮の軒のかげろふ見るまゝにあはれ定めもなき世なりけり

衣笠内大臣

29 あはれなり山おろしふく夕暮になき数まさる軒のかげろふ

光俊朝臣

(なお、夫木和歌抄では蝸牛、蜻蛉、蜘蛛の順となっている。)

右の用例から、「かげろふ」は短命なほかない虫のように考えられていたことがわかる。これは、ひを虫と混同されたからで、形態がよく似ていることから生じたものと思われる。

「ひを虫」は、『倭名抄』に、「蜻 唐韻云蜻音誘漢語抄云比乎無之 朝生暮死虫也」と記され、『黒川本色葉字類抄』に、「蜻つとね ヒロムシ朝生夕死虫也。蜉蝣フキウ同」とある虫で、蜉蝣ふゆう(カゲロウ)目に属するモンカゲロウ・カワカゲロウ・ヒラタカゲロウ・ユカゲロウなどの類を言い、幼虫が水の中で二か月から長いもので三年生活し、成虫になると一日から三日しか生きていないので、朝生まれ夕方に死ぬと言ひ伝えられてきたのである。

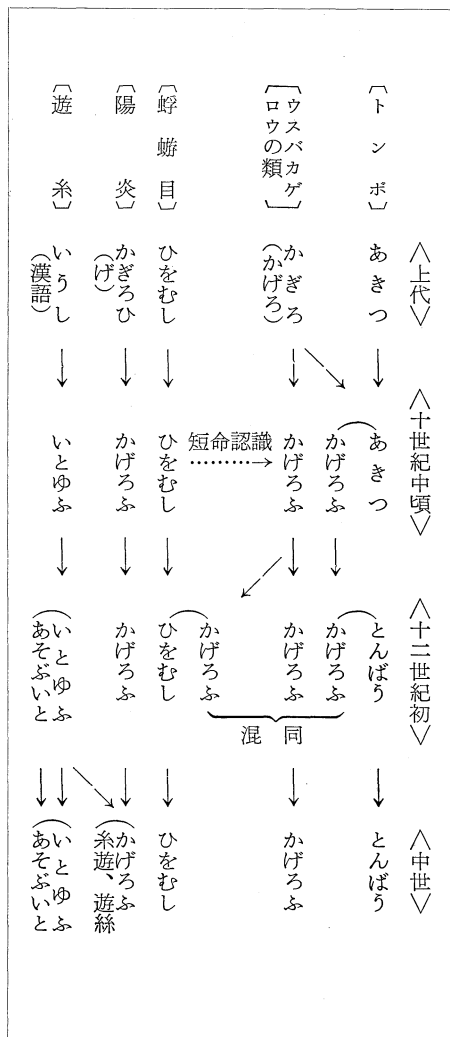
前述の脈翅目のうち、ヒロバカゲロウは幼虫が水中で生活するし、形態も蜉蝣目のウスバユカゲロウと似ているので、混同されたものと思われる。動植物学の和名は、一般に呼び習わされてきた名を元に命名したのであるから、同じカゲロウの名称を用いていることから、古来混同されてきたことが証されるのである。

ところが、『源氏物語』では、「橋姫」に、

30 十月になりて五六日のほど「薫は」うちへまうてたまふあしをこそこの比は御らむせめときこゆる人／＼あれ
となにかそのひをむしにあらそふ心にてあしろにもよらむとそきすて給て(大成卷三、心が身になっている本が別

本系に五つあり)

とあって、23と勘案して「かげろふ」「ひをむし」を区別して用いたことを知る。以後においても、『土御門院御集』、『後花園御集』『雅親詠草』『正徹詠草』などに「ひをむし」の例を見、「かげろふ」の例は陽炎、虫ともに枚挙の暇がない。すなわち、両方の語が併存していたわけで、この間の事情を通時的に整理すると次の表のようになる。



『雅言集覧』では、「かげろふ」に二項の見出しを立て、蜻蛉と糸遊・陽炎を別々に説明している。23と29の例文を挙げるべく、諸作品の用例を検索したところによると、源氏物語以後徐々に昆虫の意の「かげろふ」の用例が見られ、中世ではむしろ陽炎の意より多く用いられるようになっていく。しかし、近世の歌では陽炎の方が圧倒的に多い。

さて、ここで保留しておいた用例18 19 20の検討に入る。(源氏物語以前に溯り得るかという問題である)

18は『万葉集』巻十、春の雑歌一八一六に「玉蜻」として出ており、諸注釈書ともに「玉かぎる」と読んでいる。この方が穩当であるが、『赤人集』のように、「かけるふのゆふさきくれはかりひとの ゆみいるかたにかすみたなひく」(人麿集では解釈しにくい)となっている本文を採用すれば、夕暮に活動し始めるウスバカゲロウの類の習性が理解されていたことになる。

19は、古川晴男『昆虫の事典』(東京堂)に、「成虫は河面に群飛する種類が知られ」と述べられている蜻蛉目のカゲロウにぴったりの用例である。トンボのようにスウィットではなく、ヒラヒラと弱々しく水面近くを飛んで池または川を渡っていく姿が彷彿とされる。ちなみに、相如は『私家集大成中古I』の解題によると、生年末詳、没年長徳元(995)年?という。

20は「よのつねなご」に続いているのだから、短命の代表である蜻蛉を指していると考えるのが最も自然である。

21の歌意も20と同じ無常觀を詠じているので、選子の「かげるふ」認識は、紫式部と同様に陽炎より昆虫の方に傾斜していたことが窺える。

右の考察から、上村氏による『かげろふ日記』上巻成立の天祿二(971)年には、短命なほかない虫としての「カゲロウ」が一般に認識されていたことを知る。筆者は、このカゲロウをトンボに似た形態をもつウスバカゲロウのなかまであると見る。そして、生物学の発達していなかった当時、蜻蛉目(ひをむし)の朝生夕死虫の概念が混入して(トンボと比して弱々しい姿つきであるための連想)、平安中期の「かげるふ」認識が生まれたと考えるのである。

ま と め

それでは、道綱の母は「あるかなきかの心ちするかけろふのにきといふへし」と書いた時、陽炎と昆虫のどちらを連想していたのであろうか。

陽炎のもつ「あるかなきかのはかなさ」の特質は、第二章で捉えたごとく、“不安定な実在感に乏しい観念”“実体のはっきり捉えられないもどかし頼りなさ”である。これに対して蜉蝣（ウスバカゲロウのなかま）のもつそれは、第三章で捉えたごとく、“脆弱・無力感”“短命・無常観”である。

道綱の母が、出家を覚悟して鳴滝籠りを決行し、結局二十数日で連れ戻された後、上巻の執筆を始めたのだからとする上村氏（注）に従って、この時の作者の心情を想像してみる。この時彼女の胸の中を占めていたのは無力感ではなかったか。夫の愛情を繋ぎ留める力がないだけでなく、自分の意志だけでは出家すらできないというやるせない思いがあったと思われる。それに、男の愛の移ろい易さ（無常さ）はとくに思い知らされている。このような思いを抱いて、自己の半生を日記に書こうとした時、作者が連想したのがうららかな春の日にもえる陽炎であろうとは思われない。やはり蜉蝣（ウスバカゲロウのなかま）であったと結論づけざるを得ないのである。

（注）

- 1 柿本 奨『蜻蛉日記全注釈 上』（昭41・8、角川書店）二五一頁。上村悦子、喜多義勇の諸氏等。
- 2 動物の分類では、節足動物昆虫類蜉蝣目に属するのはモンカゲロウなどであり、ウスバカゲロウは脈翅目に属しており全く別の虫であるが、本稿では、後述する理由で当時混同されていたと思われるので、ウスバカゲロウで代表させておく。
- 3 拙稿「『よにおほかるそらごとだにあり』の解釈——蜻蛉日記の執筆意図にふれて——」（『椋山国文学』第三号、昭54・2）

- 4 拙著『古典新釈シリーズ⑦かげろふ日記』（加藤中道館、昭55・6）一〇頁。
- 5 『日本古典文学大系20 かげろふ日記他』（岩波書店、昭32・12）の八五・八六頁。
柿本 奨『蜻蛉日記全注釈 上』の二五三頁。
- 7 上村悦子『校注古典叢書 蜻蛉日記』（明治書院、昭43・4）の二八三頁。
- 8 「野草芳菲たり紅錦の地 遊絲繚乱たり碧羅の天」禹錫（岩波大系本73の五一頁）
「かすみ晴れみどりの空ものどけてあるかなきかにあそぶ絲遊」（同 一五四頁）
- 9 卷五84「晩帯を纏はむとして遊絲あり」（岩波大系本72の四〇九頁） 8、9ともに川口久雄氏校注のため、遊絲は *Gossamer* のことと注している。ただ、8を「いうし」、9を「かげろふ」と読み分けて振り仮名しているが、9を「かげろふ」と読む必然性はなく、川口氏の勇み足であろう。
- 10 十九番 遊糸 右 隆信朝臣
春来れば靡く柳の友顔に空に紛ふや遊ぶ糸遊
二十三番 同 左 女房
面影に千里をかけて見するかな春の光に遊ぶ糸遊
（小西甚一『新校六百番歌合』有精堂、昭51）
- 11 7に同じ。
- 12 高木市之助・富山民蔵『古事記総索引』（平凡社、昭49 新装版）
- 13 橘豊・田口守『蜻蛉日記』（桜楓社、昭53）
- 14 7に同じ。

〔付記〕 本稿は、昭和五十六年一月二十五日名古屋平安文学研究会第百十九回例会で口頭発表したものを二年ほど温め、追考してまとめたものである。会の席上種々御教示くださった、松村博司、小沢正夫、樋口芳麻呂、田中新一等の各先生方に感謝申し上げる。